

世界音楽時代の 20 世紀芸術音楽に関する美的研究——日本とヨーロッパを中心に

神月 朋子（埼玉大学教育学部准教授）

Tomoko KOZUKI (Associate Professor, faculty of
Education, Saitama University)

1) 研究テーマ

18 年度は、本研究の対象テーマのうち日本に関する研究を行なった。20 世紀日本における芸術音楽（現代音楽）と伝統音楽の関係について、武満徹と西村朗の作品を手がかりに考察した。

2) 研究の前提

政治的・経済的な変化やメディアの発達によって、音楽においてもグローバル化が大きく進行している。対象となる地域や文化はますます多様化し、その流通の速度もいっそう増している。こうした中であって、日本では西洋音楽受容、とりわけ伝統音楽を含めた日本の文化や美学と西洋音楽との関係が、明治以来古くて新しい、かつ根源的な問題として継承されている。

この関係について考察するとき、世界音楽の視点が不可欠であることは明らかである。今日の文化状況の要請する多元的文化主義にもとづいて古今東西のあらゆる音楽をとらえ、そのダイナミックさと文化的変容の可能性、すなわち創造性を問う視点とも言い換えられるだろう。それは、明治から敗戦後まで続いたナショナリズムとも、また最近まで続いたヨーロッパの絶対的な規範化とも異なっている。

こうした異文化間の音楽の接触によってグローバリゼーションが実現するが、音楽はそのことによって世界的規模で平準化したり、いわば無色透明になったりするというわけではない。グローバリゼーションとローカリゼーションは相関関係にある。他方、単に伝統的な日本音楽の要素を民族主義や異国趣味の意匠のもとで使うことがグローバリゼーション（およびローカリゼーション）を実現するのでもない。近現代の日本および世界という共通の環境に生きているわれわれの考え方や感じ方を基盤としつつ、そこに存在する耳の習慣——音楽の聴き方や音楽への要求をも含む社会的・制度的な習慣——をどのようにつきくずしたのか、またその際伝統的な響きや美的感覚が、西洋音楽とともにどのように創造の意識にかかわり、手がかりとなったのか。こうした観点から日本近現代の芸術創造をとらえ直し、グローバリゼーションという事態を理解することが必要ではないだろうか。

本研究はこうした観点に立って、日本初の世界的作曲家である武満徹（1930-96）およびそれに続く西村朗（1953-）の創作を取り上げ、先行研究を概観した。武満については、1960-70年代のいわゆる邦楽（器）ブームにおける創作理念と音楽表現を、西村については80年代後半以降のヘテロフォニーによる創作を対象とした。

3) 1960-70年代における伝統音楽と前衛音楽の関係——武満徹の作品をめぐって

1960年代という時代は、音楽の創作と受容において1つの転換期であった。ナショナリズム、ヨーロッパの規範化といった古くからの概念と世界音楽という新しい概念が、とりわけ北米と日本（いわば中心＝ヨーロッパから見た周縁）を中心に交錯し始め、世界音楽概念が次第に浸透し始めた時期だからである。この時期に武満が《ノヴェンバー・ステップス》（1976、ニューヨーク・フィル創立125周年記念委嘱作品）を作曲し、内外に大きな衝撃を与えたことは、この意味で示唆に富む。民族楽器の使用を作曲の条件として要求された武満は、尺八と琵琶を独奏楽器として、オーケストラと対峙させることを選んだ。2つの文化の異質性は、澄んだ楽音とサワリ（雑音や騒音）、劇的に展開する動的な時間と停滞する静的な時間、モチーフや構造の機能の聴取ではなく、音響事態や響きの変化のプロセス自体の聴取、と要約することができよう。また、武満はこうした対置を行なうために、邦楽器で西洋音楽の表現を試みることも、逆に邦楽の語法を西洋の楽器に当てはめることも回避している。そうした点に他の作曲家との違いが現われている。他方、2つの文化は同時に呼応関係も結んでおり、それはオーケストラが邦楽器のイディオムに歩み寄ることによって実現している。こうした表現によって、この作品はわれわれの耳の習慣をつきくずそうとしたと言えるだろう。そのメカニズムの解明は、今後の課題としたい。

4) 東洋的表現としてのヘテロフォニー——西村朗の作品をめぐって

1985年以降の創作を概観し、固有のヘテロフォニー、すなわち同質性の中にある異質性、あるいは異質性の中にある同質性を確認する作業を行なった。

5) 結論と今後の課題

武満と西村はともに、日本およびアジアの伝統の特性を捨象し、音楽の土台の一部とした。それは20世紀西洋の技法とともに個人の創作意識を、またわれわれの時代の創作を体現するものである。日本の現代音楽研究においては、「作曲家論」はあってもいまだ「作曲家研究」は存在しているとは言えない。今後の研究で、われわれ自身の音楽のあり方を探求する試みを続けたい。